

雁かり

【原文・書き下し文】

- 1 南來北去不レ違レ時
みなみよりきたりてきたるにときをたがえず
- 2 先後自成二行列一之
せんごのおのぎょうれつをなして之く
- 3 塞上音書傳或詭
さいじょうおんしょつたあるかいつわ
- 4 空中怪字寫何奇
くうちゅうかいじしやなんき
- 5 秋江水濶天低遠
しゅうかうみずひろてんひくとお
- 6 晚浦煙橫月出遲
ばんぽけむりよこつぎいおそ
- 7 憐爾哀鳴投レ宿夜
あわれなんじあいめいやとゆうよる
- 8 白蘋花老雨如レ絲
はくひんはなおいらめいとと

【詩型・押韻】

七言律詩

『広韻』上平五支(奇)六脂(遲)七之(時・之・絲)同用。『平水韻』上平四支。

【校勘】

・第2句「自」を『清狂吟稿』はもと「成？」に作るも「自」に改む。

【現代語訳】

雁かり

北へ南へと時節に外れることなく、その順序も自然と隊列を成して行く。辺境の地からの便りが届いたなどとは人を欺くためだったし、空に「怪」の字を書いたりしたのはなんと奇妙なことではないか。

秋の川は水がどこまでも広々として、雲が垂れ込めて空は遠く向こうまで低くみえる。夜の浦には霧がかかっている。月がはなかなか見えない。夜、悲しげに鳴いてねぐらに入るお前が哀れだ。白蘋は花がしおれて雨は糸となって降り続いてくる。

【解題】

この詩は、月性の初めての遊学先である豊前は恒遠醒窓の蔵春園での作。時に天保四年(癸巳

一八三三秋、月性十七歳。

詩題に選ばれた「雁」は、異郷に身を置く詩人たちが好んで詠んだ詩材である。このような動植物、或いは器物を詠む詩を「詠物詩」といい、詩の中に「雁」の字を用いることなく雁を想起させつつ、いかに作者の心情を詠むかが腕の見せ所となる。この詩は首聯（第一句と第二句）で雁の渡りとその隊列である雁行を視野に収め、頷聯（第三句と第四句）では雁および空に因んだ故事を連想し、頸聯（第五句と第六句）で凄涼な秋の昼間と夕暮れの景色に詩人寂寥たる思いを溶け込ませ、最後の尾聯（第七句と第八句）では旅雁に対して異郷をさすらう我が身を重ねて詠むというように基本的な構成をなしている。ただ第四句の故事が雁とはやや距離のある用い方であったり、全体として作者である月性が見えてこないという印象を受けるのは、実際に雁を目にして詠んだというよりも、雁という詩題を与えられて作ったということに起因しているのではなからうか。

【語釈】

1 南來北去 季節ごとに北へ南へと渡る雁に異郷にさすらう旅人同然のわが身を重ねる。唐、杜荀鶴「秋に臨江の駅（宿場）に宿る（秋宿臨江驛）」詩に「南より来たり北に去りて二三年、年去り年来たりて両鬢の斑（白髪）（南來北去、三年、年去年來兩鬢斑）」。「ここは一応、「南より来たりて北に去る」と訓んでいるが、「南」と「北」、「来」と「去」という対義語で定めなき境遇を示している」であり、「南へ北へと行ったり来たり」という意。 **不違時** その時節に外れるようなことはない。

2 先後 前後の順序。 自 自然と。 行列 斜めに並ぶ、いわゆる雁行のこと。 之 行くこと。

3 塞上音書 「塞上」は北の辺境の地、「音書」は手紙で、いわゆる雁書（がんじょ）の故事に基づく。『漢書』「蘇武伝」に、漢の武帝の使者として敵対する北の匈奴に赴いた蘇武は抑留され帰順を強いられたがそれを拒み、羊飼いとしてみせ長らえること十九年。昭帝即位後、匈奴と和睦を結ぶと、「漢武等を求むるも、匈奴武は死せりと詭り言えり。後に漢使復た匈奴に至り、常惠（共に囚われている者）其の守る者（看守）と俱に、夜漢使に見ゆるを得んことを請いて、具に自ら陳べ道いたり。使者をして単于（匈奴の王）に謂わしめて、言えらく天子（昭帝）上林（長安の都にある宮苑の名）中に射して、雁を得るに、足に帛書（絹に書かれた手紙）を係ぐ有りて、言えらく武等は某沢の中に在りと。使者大いに喜び、惠の語の如くして以て単于を讓む。単于 左右を視て驚き、漢使に謝して「謝罪し」曰く、武等は実（まこと）に在りと（昭帝即位、數年匈奴與漢和親。漢求武等、匈奴詭言武死。後漢使復至匈奴、常惠請其守者與俱、得夜見漢使、具自陳道。教使者謂單于、言天子射上林中、

得雁、足有係帛書、言武等在某澤中。使者大喜、如惠語以讓單于。單于視左右而驚、謝漢使曰、武等實在」と記される。明、宗臣「元美を待つも至らず 吳峻伯と前に席上に賦す(待元美不至同吳峻伯席上賦)」詩に「塞上の音書」「ここは招待の手紙をいう」胡ぞ伝わらざる、君を遅てば明月幾ど嬋娟たり(月の美しく輝くさま)(塞上音書胡不傳、遲君明月幾嬋娟)」。傳或詭 前の【語釈】「塞上音書」で『漢書』に記されるように、雁の足に括られた手紙によってもたらされた知らせとして、蘇武は生きていると匈奴の単于に鎌をかけたことをいう。

4 空中怪字寫何奇 東晋の殷浩が戦術的失策によって地位や身分を剥奪され、一日中、空中に向かって「咄咄怪事(おや、けつたいな事じゃないか)」の四文字を書いていたという故事に基づく。劉宋、劉義慶『世說新語』「黜免(免職)」に、「殷中軍(中軍將軍)廢せられて(地位身分を剥奪されて庶民となり) 信安に在り。終日恒に空に書して字を作る。揚州の吏民(官吏と庶民)義を尋ねて之を逐いて(殷浩の徳義の高さを慕って来て)、竊かに視れば、唯だ咄咄怪事の四字を作るのみ(殷中軍被廢在信安。終日恒書空作字。揚州吏民尋義逐之、竊視、唯作咄咄怪事四字而已)」。この句は前句と対をなしているののでやはり「雁」に因んだ故事を用いるのが自然だが、雁が飛ぶ秋空全体を視野に収めた詠みぶりとなっている。

5 秋江水闊 川の水が清く漫漫と湛えられ、はるか遠くまで見渡せる秋の情景はよく詩に読まれる。「三隅山莊十二勝詩 故の準奥番頭(藩主の側近である奥番頭に準ずる職)村田松齋翁(村田清風)の囑みの為にす(三隅山莊十二勝詩 爲故準奥番頭村田松齋翁囑)」「清狂遺稿」下三六歳は、詩題にも記されるように村田清風の居宅(山口県長門市三隅下)の周辺の十二の名勝を詠んだものであるが、「紫津(青海島の静が浦)の彩霞」詩には「沙際(砂浜)舟を待てば 秋水濶く、立ちて看る孤鶩(野鴨が一羽)の霞と飛ぶを(沙際待舟秋水濶、立看孤鶩與霞飛)」。天低遠 空は遠くどこまでも見やれるが雲が垂れ込めて低くみえる。菅茶山(一七四八—一八二七)「夏日即事(夏日即事)六首」其五に「天低く 遠樹(遠くに見える樹木)偏に雨を含み、山断たれ(山並みが途切れるあたり)盤鵬(盘旋する鷲) 迥かに雲に入る(天低、遠樹偏含雨、山断盤鵬迥入雲)」。

6 晚浦煙橫 夕暮れの浦に靄がたなびく。元、黄庚「仇山村の九日の吟卷(九月九日の重陽の節句に詠んだ詩)に和す(和仇山村九日吟卷)」(烟は晚浦に横たわりて蒹葭(オギやヨシ)といった水草)碧なり、霜は寒林に落ちて橘柚(タチバナとユズといった柑橘類)黄なり(烟横、晚浦蒹葭碧、霜落寒林橘柚黄)」。月出遲 靄がかかっているので待たれる月はなかなか顔を出さない。明、顧清「曲水草堂の詩(曲水草堂詩)」は(水面 雲無ければ月出づること早く、水面 雲生ずれば月出づること遅し(水面無雲月出早、水面雲生月出遲))と雲が邪魔していることを詠む。

7 憐爾 ……というお前が気の毒に思われる。「爾」は二人称の代名詞。おまえ。唐、張九齡「碁母学士と月に月夜に雁を聞く(同碁母學士月夜聞鴈)」(聯翩として(雁の飛ぶさま)俱に定まらず、

憐むべし爾の郷を越ざかるの心を(聯翩俱不定、憐、爾、越、郷、心) **哀鳴** 悲しげに鳴く。「夢護草廬(清

の顧祿の編んだ庵) 凶巻に題す 前韻に疊ぬ『清狂遺稿』上のこの詩の前に置かれている「題顧鐵卿大樹

家聲卷、次其四十自壽詩韻二首の其の一の韻字をそのまま用いる」(題夢護草廬圖卷疊前韻)、『清狂遺稿』上

十九歳)に(旅雁哀鳴して秋索莫たり「物寂しい」、孝烏(年老いた親ガラスの世話をする子ガラス) 帰

り宿りて月黄昏たり「薄暗い」(旅雁、哀、鳴、秋、索、莫、孝、烏、歸、宿、月、黃、昏) **投宿** 旅人が宿に泊まるよう

に、旅の雁がねぐらを求めること。明、王雲鳳「玉泉亭 石邦彦の韻に次す「石邦彦が詠んだ詩の

韻字と同じものを同じ順序で用いる」(玉泉亭 次石邦彦韻)「日 晩山に下つ 宿に投ずるの雁、煙(靄)

秋浦に迷う 寒を渡る鐘(日下晩山投宿雁、煙迷秋浦渡寒鐘)。

8 白蘋 白い花を咲かせる水草。 **花老** 花がしおれる。唐、錢起「萬兵曹(官職名)の廣陵に

赴くを送る(送萬兵曹赴廣陵)に(山晚くして桂花老い、江寒くして蘋葉(田字草)衰う(山晚桂花老、

江寒蘋葉衰)。**雨如絲** 細い糸のように雨が降っている。宋、李処権「雨止みて王侍郎(官職名)

を送る(雨止送王侍郎)に(南州「南の地」春老い 雨絲の如く、眼を刺して「眼に触れて」青秧(青

い苗)に水満てり(南州春老、雨如絲、刺眼青秧水満)。